〔地域総研紀要　5巻1号，PI－XII（2007）（一般論文）〕

*聖なるものとコミュニテイ
―日中宗教文化の比較研究(二)江西省―

**高山乾忠
***渡辺勝義

キーワード：
修行・禅・不立文字・教外別傳・覚り・閉関・拈華微笑・以心伝心・空・見性・佛（ほとけ）・全真道教・許真君・仙人

一、はじめに

経済的には間もなくアメリカを追い越すのではと囁かれるほどの勢いでめざましい発展を遂げる現代中国であるが、そうした中にあってつぶさに調べて見るとあちこちの地方の寺院や道観では修復・改修が盛んに進められており、佛教や道教などさまざまな民間宗教が次第に息を吹き返しており、往時の隆盛を偲ばせるほどの兆しを見せ始めているといっても過言ではない。

さて今回は前回の福建省での調査（一）に続き、江西省南昌市に調査地を移しての研究報告であり、分別・無分別智の絶対・相対世界を脱して、無依の真人を捕捉し、単なる模様にすぎない言葉にトポスを貫く真の絶対無の重みを預けられるや否やが課題である。

二、江西省の政治・経済と宗教

江西省は東・南・西の三方が山で囲まれ、北部は盆地型の平野、中央部が丘陵で山地と丘陵が総面積の約七〇％を占めている。北部に広がる鄱陽湖平野は肥沃な穀倉地帯で、長江中下流大平野の一部をなし、鄱陽湖以南の丘陵地帯には吉泰盆地や赣州盆地など赤い土壌の盆地が数多く点在する。鄱陽湖は中国最大の淡水湖で、洪水の際に長江の水量を調節する役割を果している。

江西省（略称：赣）の総人口は四、一四〇万人で、省庁所在地の南昌は人口四三三万（うち市内人口は一七〇万）、九江（五一万）、景徳鎮（四〇万）、萍郷（七五万）、新余（七五万）、鷹潭（一八万）となっている。

江西省の国内総生産額は二〇〇三億九七〇〇万元で全国の第一七位であり、一人当り国内総生産の創出額は四八五一元（全国の第二三位）である。また、工業生産総額は九三二億元（全国の第二三位）、農業生産総額は七六〇億元（全国の第一四位）、個人消費水準が二三九六元（全国の第二二位）となっている。江西省は非鉄金属を中心に鉱物資源が豊富で、埋蔵量が全国一のものだけで十一種を数える。銅、タングステン、ウランは全国一の生産量を誇る。銅は主に中国最大の銅採掘・精錬企業の江西銅業公司に所属する徳輿銅鉱（全国第一位）や永平銅鉱などで産出し、またタングステンは南部の大吉山（全南県）や西華山（大余県）が主産地である。このほか銀、金、タンタル、岩塩、リン鉱石、鉛、石炭、鉄鉱石なども産出する。

一方、農業も盛んであり、コメ（全国の第五位）、大豆、菜種（七位）、落花生、ゴマ（四位）、綿花、サトウキビ（五位）、ミカン、茶、豚肉などを産する。

古来、江西省は中国における南北交通のオアシスにあたり、華北・長江流域から広東・福建に至る主要ルートであった。秦代、中原から広東に入るのに赣江が利用された。唐代の七一六年に宰相の張九齢が大庾嶺新道を切り開いて以降、主要貿易港の広州に陸揚げされた海外の物資や友好使節は先ず北江（珠江の一つ）を遡り、次に大庾嶺（梅嶺関）を越えて章水に入り、

* Received January 19,2007
** 長崎ウエスレヤン大学　現代社会学部　国際交流学科
*** 長崎ウエスレヤン大学　現代社会学部　地域づくり学科

そして贛江（贛州・吉安・南昌）と鄱陽湖を下って長江に出、さらに大運河経由で洛陽や長安へと向かった。

今回の研究調査対象の一つである南昌市にある西山万寿宮の「浄明道」は道教の流派の一つである。歴代の皇帝に推薦されている「浄明道」の創始者許遜氏の先祖はこの運河を経由し、河南省の許昌より南昌に入り三世紀半ばに発展した。また、四世紀の末（東晋）、僧の慧遠が廬山に入り、そこを永住地として東林寺を経営し、多数の僧俗の求道者を指導する教団主となった。慧遠は念仏結社を作り、これがのち白蓮社に発展し、中国浄土教の源流となった。海禁政策が実施された明清時代、とくに広州一港だけが開港場となり、明代、贛江が輸出入の物資の運搬路となった為、南昌や贛州は非常に栄えた。絹織物や茶、陶磁器などの主要輸出品はこのルートを通って広州に運ばれたのである。だが、さしものこの大動脈もアヘン戦争後、とくに粤漢（広州～武漢）鉄道が開通するのに伴い、急速にさびれていった。

北宋時代から江西省景徳鎮の陶磁器業が形成され、特に景徳鎮窯が青白磁の焼成という技術革新に成功して、窯業の表舞台に登場した。景徳鎮は付近の高嶺山から良質の粘土（高嶺土）を産出し、また燃料の松材などにも恵まれていた。もと昌南鎮と称したが北宋の景徳元年（一〇〇四年）、元号をとって景徳鎮と改称した。以後、官窯が設置され、明代には中国最大の陶磁器生産地となった。清の乾隆年間に製陶技術が最も進んだが、太平天国の乱で打撃を受けた。明清時代、景徳鎮は中国四大名鎮の一つに数えられた。

共産党の初期革命運動の主要な舞台となった江西省では、まず二二年九月、毛沢東や劉少奇ら共産党の指導のもと安源炭鉱で労働者のストが行われた。ついで二七年八月一日、周恩来や朱徳、賀竜に指導された革命軍が南昌で蜂起した。さらに同年一〇月、湖南での秋収蜂起に失敗した毛沢東が井岡山に革命根拠地を築いた。

第一次五カ年計画期（五三～五七年）、六項目の国家重点プロジェクトが該省に投入された。航空機を製造する大型軍需工場の洪都機械廠や大吉山タングステン鉱、西華山タングステン鉱などが建設された。またこの時期、江西綿紡織廠や江西造紙廠、江西トラクター工廠など一六九項目の地方重点プロジェクトも建設された。六四年頃、華東後方戦略要地と位置づけられ、国防「小三線」建設の重点とされた。「小三線」建設では兵器製造が中心とされ、山中の洞穴に高射砲などの生産ラインが造られた。また長江沿岸の九江が艦船その他の装備を海軍に提供する「大三線」船舶工業の基地とされた。さらに各軍需工場に特殊鋼を提供するため、鉄鉱石産地の良山鎮（新余市）に江西鋼廠が建設された。九二年、国務院によって内陸開放都市に指定され、また南昌ハイテク産業開発区の設置も認可された。その後、南昌ではさらに省クラスの「昌北開放開発区」も設置された。また、同年、長江と京九（北京－九竜）線が交わる位置にある九江が長江沿岸開放都市に指定され、また九江港も正式に対外開放された。近年、二大工業都市の南昌と九江を結ぶ高速道路沿線に「昌九工業回廊」を形成する計画が推進されている。

現在、江西省には中国最大の銅精錬企業である江西鋼業公司貴溪冶煉廠、九江石油化工総廠、新余鋼鉄有限責任公司、昌河航空機工業公司、江鈴五十鈴自動車有限公司、景徳鎮華意電器有限公司、南昌航空機製造公司、萍郷鋼鉄廠、江西共青羽絨廠などの産業がある。

三、雲居山・真如禅寺

私たちは南昌の千佛寺近くのホテルに宿泊した。

翌朝、朝食を済ませると九時に車二台で九江方面を目指してホテルを出発し、中山路を通って南昌農業大学・南昌商学院前を通り過ぎ、農村部（国家食料備蓄倉庫）側を走り抜けて、江西五州石料公司を左に見ながら九江を目指した。注意を引いたのは車中からみる景色はどこもかしこも赤土だらけだ…という点である。この点は南昌空港から南昌市内のホテルに向かう車中からも随所に見られた光景ではあるが…。さて、一時間十五分ほど走ると大きな道路に出た。それからまた山中に入り込み、でこぼこ道を時速八～九十キロの速さでつっ走って九江に着いたのは十時半頃であった。

そこで真如禅寺を案内してくれる予定の人と待ち合わせるため、三十分ほど休憩した。ここには珍しく首輪のない犬があちこちに散見されたが、どれも痩せていてスマートな感じであった。後で聞いた話であるが、この辺りに暮らす人たちは農暦の入冬の頃に体を温めるために犬を食すのだという。その時は多量のからしを入れるそうである。また、農暦の白露にはぜんざいを食べるとのことであった。

真如禅寺・山　門

さて、私たち一行は都合車四台となり、それからまた車で走り出して十一時三分頃には進路方向を左に大きく曲り、一路百花山「真如禅寺」をめざして山道を登っていくことになった。いよいよこれから…である。海抜千メートル近くの高い山を螺旋状にグルグル回りながら登って行くため、車酔いで気分を悪くした者もいた。十一時十五分頃、山の途中七～八合目くらいの所には左手に南陽古寺が、そして九合目辺りには観音古寺があった。

やっとの思いで私たちはめざす真如禅寺（江西永修縣雲居山真如禅寺）の山門に辿り着いた。山門の向かって左には来訪者のために次のような立て看板が掲げられていた。

雲居山

雲居山、原名は欧山であり、長年に渡り雲が立ち、霞がたなびいているため、李唐王朝の時代に雲居山と改名したのである。雲居山はその美しい姿と威風堂々の迫力で鄱陽胡の西岸から切り立っている。主峰は海抜九百六十九・四メートルで、全面積は二百三十平方キロメールである。国道の一〇五号線と三一六号線は山の側から通って行く。登山道は頂上まで十五キロメートルである。古今を通じて雲居山は天から与えた美しい景色と著名な仏教禅宗の道場として人々が称賛してきた。古人曰く；「雲嶺江南一、名高四百州」、「冠世の絶境、天上の雲居」と。現在、県名勝風景地区に指定された。

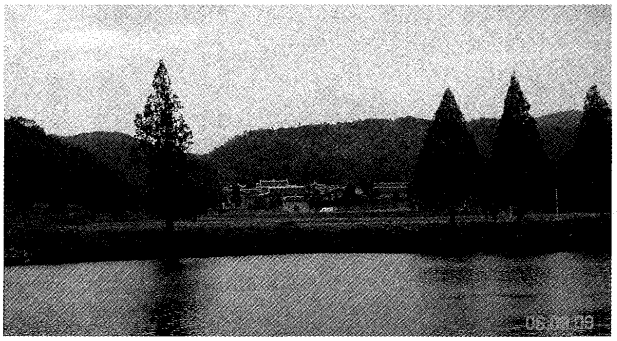
真如禅寺は山頂の“蓮花城”内に位置し、唐憲宗元年（八〇八年）に造られ、千数百年間に高僧を多数輩出し、今国級の公開寺院に指定されている。ここは全国三大森のモデル地区の一つになっている。真如禅寺は近代の高僧である虚雲老僧侶が雲居に再構築した功績により、彼の弟子は国内外に至る所に住んでいて、毎年、参詣する人は絶え間がない。

現在、真如禅寺は中国仏教協会の会長一誠法師が法席を管掌している。百数十名の僧が住んでいて、秩序整然、道義正しく、農禅兼業、彼らは中国の仏教文化の為に大きな貢献をしている。真如古刹と照り映える古跡は至るところにあり、例えば、園通、瑶田、雲門、上方、祇樹などの寺院が山のあちこちにあり、“千人鍋”が当時の繁栄ぶりを物語り、数百基の唐、宋、元、明、清の時代のお墓が歴史の証人であり、二百数十首の漢詩が歴代文人や書道の達人の足跡を表している。ここの寺院と絶景は観光や宗教修行の名所となっていて、特に山の東側に怪石が多く点在し、まるで仙人がその中に隠れているようである。山の北側は山の峰が険しく、真下に百鳥湖がある。百花谷は仙境と言われ、珍しい滝や滝壺、桜、つつじ、金木犀、紅梅などが季節によって満開する。五十数カ所の観光ポイントは遠方の来訪者を心より歓迎している。このあたりは植被が豊富なため、真夏になっても気温は僅か二二度前後にしかならぬ、空気が美味しく、環境が大変静かで、避暑や休暇や会議などに適した場所である。

右記の文中にその名がみえる初代の虚雲老師は五つの王朝と四つの世代を生き抜いてきた人であり、百二〇歳まで修行にいそしんだ類まれな禅僧である。（注1）

さて、私たちは山門をくぐり抜け、生き物の放生を行うという円相の明月湖の脇を歩くとまた直ぐに車に乗り込み、遠く視界の開けた先に見えている山間の静寂そのもののひっそりとした佇まいの真如禅寺をめざした。

当寺は山門の立て看板中に「農禅兼業」という文字が見えるように、自給自足の生活をしているという。また、今は電気や水も不自由なく使えるようであるが、それも最近になってのことのようであり、ずっと以前には恐らくは電気も水道も通ってはいなかったこと


明月湖より見た真如禅寺　全景

であろう。俗界を遠く離れたこの山上の地は、環境的にも仏道修行にはまさにうってつけの閑静な場所である。思えば日本に臨済宗を持ちかえった栄西の師「虚庵懐敞」も、また曹洞宗を開いた道元希玄の祖「長翁如浄」も地方の山寺にいた僧たちであった。

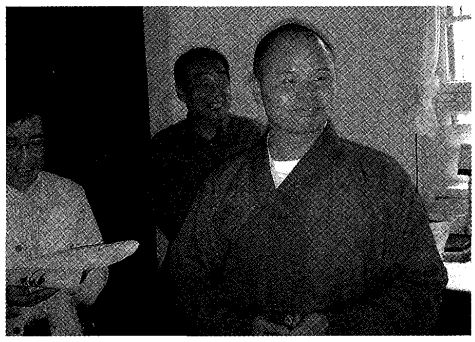
案内された大雄寶殿にはすでに先客があって、当寺の純聞住持が香港から来たという数人の仏教徒と会談しておられた。私たちは御仏に礼拝の後、早速純聞住持にお話を伺うことになった。

当真如禅寺の住持である純聞禅師は年の頃は三十代後半といったところであろうか、まだまだお若い禅師である。現中国仏教教会の会長である「一誠法師」のお弟子ということで、二〇〇二年に京都で開催されたアジア佛教会議にも参加したことがあるとのことであった。

当禅寺は中国仏教発祥の地であり、今も昔も僧侶の資格は当寺が出しているのだとか…。数年に一回、中国全土から三万人もの僧侶が此処に集まって来るそうであり、鑑真和尚との交流が今でもあるのだという。また、当真如禅寺で今使っている油は日本製のものである…とか。純聞住持の話は「あなたたちは外国に行くにしてもまず、自文化を覚えなさい。佛教をよく学びなさい」ということであった。

純聞師はそれだけ言うと、今度は「さて、一筆書いて戴こう」と側仕えのお弟子さんに急ぎその用意を促された。思いがけない、またあまりに急な話であったが、こうした時に驚きあわてて尻込みするようでは日本から来た修行者の名がすたろうというものである。即、立ち上がると私は思い付くままに、

佛神一如
人之佛子
亦人之神子
故佛神人
一如也
無之真理也


純聞住持

とためらわず一気に書かせて頂いた。はたして正しく文を為しているのやら分りはしない。すると、それを傍で見ておられた香港からの来訪者の一婦人が私にメモ書きの四文字を見せて、これを私に書いてくれと言う。断る訳にも行かず、成り行きに任せて言われるとおりに書いたものの、文字を書くのが苦手な私にとっては全くの冷や汗ものであった。この婦人のために一体何と言う文字を書いたか、今では思い出せない。（佛縁多謝）

続いて、純聞住持が私に「何と書きましょうか」と聞かれたので、私は咄嗟に「観世音菩薩」と書いて欲しいとお願いしたところ、墨痕あざやかに見事な文字を書いて頂いたばかりでなく、なんとその書を頂戴する栄に浴し、又とない今回の旅の土産になった次第である。これまさに、み仏の賜りものでなくして何であろうか…と感慨一入であった。

それから私たち一行は、もと雲南の音楽学院で英語教師をしておられたという真城師と明道師お二人のお導きで当寺の各所を特別に案内していただき、更には長年に渡り閉関の修行を積んで来られたという今年九十三歳になられる弥光法師との面会が叶えられることになった。

自給自足のための畑

四、閉関（三年不出屋）の修行

インドにおける禅の系譜は西天二十八祖とされ、第一祖は釈尊の佛の心を以心伝心で受け取った摩訶迦葉にはじまり、第二祖阿難陀と相承されていくが、中国の禅宗の歴史はその第二十八祖である菩提達磨にはじまる。達磨大師は南天竺の乞香至国の第三皇子で、本名は菩提多羅といい、中国の梁の時代普通元年（五二〇）に、つまり六世紀の初め頃、広東省広州に上陸、揚子江を渡り、魏の都の洛陽に来て嵩山の少林寺で坐禅した。中国の禅の系譜は

この菩提達磨を第一祖とし、継いで二祖慧可―三祖僧燦―四祖道信―五祖弘忍―六祖慧能（南宗禅）と法統が継がれていくことになる。（注2）

さて、第一祖である達磨大師は「面壁九年」という言葉が伝わっているように洞窟の壁に面して坐し、九年の間ひたすら参禅し続けた人といわれる。達磨大師は洞窟の出入口こそ塞がれなかったけれども、のちの禅修行者はこれに習って、「閉関」に際して仏式の儀式を終えて一端関房（参禅瞑想の部屋）に入ると、「断」と書いた封印を貼って出口をまったく封鎖してしまう。すなわち出入り口を固く閉ざして、修行者は世俗の一切を絶って三年の間そこから一歩も外に出ることなく、一切外部の者と合うことなく修行に励むという訳である。従って、一般人はこれに立ち入る事も近付くことも許されない。

この閉関の行には修行者が行満成就するのを見張る「神秘的東西」即ち、目に見えない或る不思議なモノが居て、修行者がサボったり眠ったりすると直ぐに起されてしまい、或いはまたこれが修行者を打つのだという。そして三年経っても行満できなかったら、もう一回即ち更に三年続けて修行することに成る。

一年ほど前のことであるが、こうした話をまったく信じない某大学教授がこの三年間の閉関修行に挑んだことがあったが、結果はさんざんなもので関房に入った後にその人は一月足らずで鬼に追い出されてしまった。その時その人の顔全体がひどく腫れ上がっていたという。これまさに行者の恥と言うべきであろう。

斯様な訳でこの閉関修行がより良い行実を結ぶためには修行者本人の固い決意と信念、不断の努力が第一に必要とされることは言うまでもないが、それ以上に関房の外で守る者がとても重要であり、修行者以上に力を有する者でなければならないとも言われている。もしも関房を外で守る者が力無き者であったり、或いは不用意に他の者に替ったりすると、中で修行している者が不気味さや不快を覚えたり、またある種の抑圧を感じたりして精神的に不安定になり、行が達せられないということにもなってしまう。だから、外で関房を守る人はずっと守っていくということが大切であり、人を変えてはならないというのである。

食事はどうするかというと、一日に一回縦・横三〇×五〇センチ程の窓から御飯を差し入れてもらい、一日に一膳の御飯を食べるそうである。衣服の洗濯は普通、自分で洗うのだという。修行者はほとんど病気することはないとのことであるが、どうしても身体の調子が良くならないときには話すことは絶対に禁じられているのでメモ紙に書いて外部の人に知らせ、薬を少し買ってもらうこともあるとか。また、場合によってはどうしたらよいか寺の長老に少し相談することもあるらしい。

閉関修行の最終目的は勿論悟りをひらくためであるが、修行者によってその関房内での修行方法や内容は多様であり、ただひたすら参禅打坐する者、何千巻もの経本（経蔵・律蔵・論蔵など）を看る（読む）者、香を焚く者、佛の周りを囲繞する者、己の舌を刺してその血を墨替りにして華厳経典など厖大な経典を書き写す、いわゆる血経を書く者、戦場で亡くなった将軍や兵士たちの供養に没頭する者、またそれら幾つかを併用する者など、かなりのバリエーションがあるようである。

私たちが特別に面会を許された弥光法師は長年に渡り閉関の修行をしている老師であり、当真如禅寺ではもう六年も閉関の修行をしておられ、今年九十三歳になるという。以前に高旻寺で三年閉関の修行をし、また浙杭省の杭州蕭山でも閉関の修行に入ったが、此処は人の往来が多くあってあまりにも騒がしく賑やか過ぎて落ち着いて修行出来なかったために当初は三年の予定であったが一年で出関したとの事であった。

弥光法師は方言しか分からないようであった。それでこちらの質問についても行き違いが多く、若い僧侶が「そういうことを問うているのではありません」などと何度も老法師に耳打ちしていた。一番にこうした言葉の障壁が立ちはだかるものの、知り得たことを出来る限り以下に記してみたい。

弥光法師の閉関での修行法は経を看たり念仏を唱えたりはせずに、只ひたすら坐禅するだけであるという。一～二時間やってそれに飽いたら、今度は

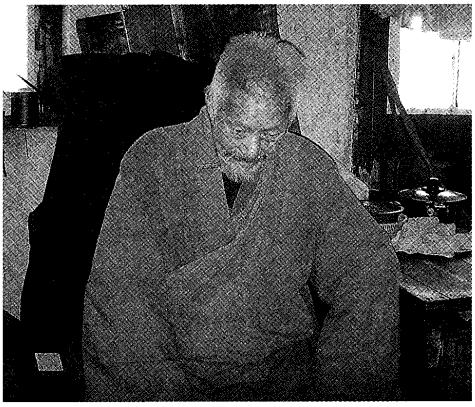
向って右より弥光法師・真城師・高山・渡辺

仏殿で佛の周りをグルグルまわる囲繞の法をし、また元の坐位に戻ってきて坐禅する…この繰り返しであるという。また、夏と冬とでは座る場所を変えるそうである。この弥光法師の自力行による功徳は大きく、行満に到れば経は看ずとも一切の経典の意味が良く了解されるのだという。

さとりをひらくにも順序があって、「主要的由明到心」つまり大事なのは心を明にすることであり、これを「三見」というのだそうだ。閉関の修行ではまず第一段階として、生まれ乍らに此の身に有する東西（魂魄の魄のことか？）を見ることが必要である。「到父母肚子投胎是有个東西的」で、これなくしては道を知ることも話すことも出来ないし分からないという。これが第一段階であり、小見である。そして大見は心を見るのであり、再見というのは「性」を見るのであり、この性とは釈迦牟尼佛のことであるという。「見性」ということか…。そして、見た事を人に語ってはならない…とも。ちょっとでも道を説き語った時にはそれは直ちに間違ってしまうとも。悟りの境地は言うにいえないもの、語れないものである…ということを言いたいのだろうか。まさに不立文字・教外別伝の世界ではある。

私たちはまず初めに、仏道修行に一生を賭けて来られた弥光法師の今の感慨はどのようなものであるかをお伺いしたいと尋ねた。次に老法師が体得された悟りの境地とはどのようなものであり、また「空」についても尋ねた。

弥光法師によれば修行の目的、それは「空」になることであると言われた。また、自身に問うことを、自分の根源を捜し求めること…とも。


弥光法師

そして「空」とはどういうものかというと、「粉塵よりも小さくて、宇宙よりも大きいものである」「我・彼が無くなり、自他一体である」と。但し「これは修行してみないと分からない」とも。

言葉の壁があって、一番伺いたい肝腎のところをうまく聞き出すことは出来なかったが、以下、老法師から聞き得たことを箇条書きにしてみると大凡次のようなことであった。

道を修するには三つが必要。まずはお経を読むことだ／お経をズッと唱えなければならない。そうすることによって佛との心の疎通が出来るのだ／道心というものは読経だけでは不可である／私は三年間の修行があるからこそ、いつでも空の境地に入れるのだ／ある時、周りの音が聞こえなくなった。これも一つの空である。その時は仮に自分の周りに数百万、数千万の人々が自分の周りに居たとしても何にも聞こえない。この時、佛と一体であり、また、何にも見えない。我・彼の二つはないのだ。自分が佛であり、佛が自分である…。

真剣に弥光法師のお話を伺いながら強く感じた事は、一言でいえば老師の心の清らかさ、爽やかさ、誠実さであった。老師の真に道を求める姿勢がそう感じさせずにはおかないのであろう。大抵は観光地と化した世俗の僧院とは違って、ここ真如禅寺の僧侶はどなたも心の綺麗なお方ばかりであるという印象を深くした。中国でも仏教の本流は今もって立派に残しているのだな…と思うのである。

儒教は漢代に国教となったが、その後解釈学に堕して衰退。唐代には道教が勢力を拡大して、儒教は愈々その生彩を失った。その間、仏教はシッカリ中国社会に根を下ろしたのである。

暖かいもてなしに感謝しつつ、私たち一行は今日の目的を果して、帰途に着くこととした。午後二時二〇分頃に真如禅寺を出発してその帰り道、途中の九江の小さな店でみんなで食事をすることになった。ちなみにその時にたべたものは、ひまわり（種）、亀、猪、ヤギ、兎、山鳥、ザリガニ、雷魚、温野菜…などなどであった。そして食後、九江を出たのは四時二十五分頃であった。

120歳まで参禅した虚霊老師の記念堂

五、佛教（禅）がめざす「悟り」の構造

人は何故に修行するのか。佛教の目的、或いは佛教徒の究極の理想はというと、それは悟りをひらいて佛となることであろう。従って彼らの日々の生活の中心はその悟りを求めるための修行にこそあるのだといえよう。そして、その悟りとは釈迦がナイランジャナー（尼連禅）河のほとりの菩提樹の下で証得した菩提（等正覚）を指し、この悟りを体現した人を仏陀（覚者）という。また、この悟りの智見を般若の智慧とも呼ぶ。

だが、肝腎なことは「釈尊はそもそも修行したから佛になったのか」、また、「釈尊は一体どのような悟りを得たのか」ということであるが、その釈尊の悟りの内容が未だに皆目分からないのである。

既に了解済みの筈の「人が佛になるとはどういうことなのか」、「釈尊は一体誰から法統を嗣いだのか」、「釈尊の人師は一体何と言う人だったのか」といった根本的な大問題が実は未だに解決していないのである。

禅の構造は基本的に「師―私」という構造で成り立っている。

禅の系譜は、まず人師についてその人を佛であるとして修行に励む。修行の最初には「正師が不可欠である」という事は日本の道元希玄も言っていることであるが、問題はその師が果してどこまで佛を体現出来るかにあるのである。

霊鷲山における釈尊と摩訶迦葉との間に無言の内に交わされた「拈華微笑」の話（注3）にある如く、禅はあくまでも人師と弟子とのDramaturgie（ドラマツルギー）であり、両者の関係性の中で成り立っている。人師が思い描いているものを以心伝心で即座に自分の心に写し取り、受け止めて、命じられる前にそれを即時具現化（行動）しなければならない。これは誰にも容易に出来ることではないだろう。しかも、これは佛に仕えてこそ成り立つ論理である。佛に仕えることによって世界が佛界になり、その佛国土の人々が救われるということになるからである。

このように「師に仕える」ということは、この世界を佛界にするためであり、またそうならなければその信仰は正しいとはいえない。これ自体が菩薩行なのであるから。

ここで大切なことは、絶対に師が佛でないといけない…という点である。真面目に禅をやろうとする人は、自分は「本当に佛に仕えようとしているのか」、また「佛に仕えるとは一体どういうことか」ということを真剣に考えないといけない。「佛とは何か？」について極限まで追い詰めなければならない。ただなんとなく師匠を選んで、それに仕える振りをしたところで全く無意味であり、時間の無駄と言うべきである。結局、それは自分の我欲でしかなかったということである。佛界を作れなくては意味がないのであり、「どうやって仏界をつくるか」これこそ佛教が本来伝えようとしたものである。今日、小乗・大乗佛教の両方から佛教の本質構造が抜け落ちてしまっているのである。

詰まる所、一休も良寛も「佛が何を求めているか」を人師には求められないので、直接に佛に求めようとしたのではなかったか。

禅の恐さは人師の側に立つことである。自身が真に解脱し、佛になったものでもない限り、決して人師になれるものではない。そうした道に対する厳しい自戒こそが重要なのではないのか。佛になれる人は「爪上の土」というか極く少数の、つまり最初から選ばれ決まったことだとしか言えないのである。釈尊は決して人師について覚者つまり仏陀になったのではないからである。

実際にやってみればわかる事であるが、禅僧は専ら坐禅を修行し、内観・自省によってまず心性の本源を悟ろうとするのであるが、永年坐禅して「悟れないということが分かった」位のことではそれは決して真の悟りとは言えないであろうし、それで人師となって弟子をとって養成するなどと言うことは断じて不可能であろう。

禅の修行者は誰もが究極の境地をめざして日々修行にいそしむのであるが、精神を集中して真の無我の境地に入ることの至難さは行じた者にしか決して分からないことである。ましてや当たり前のことではあるが、禅は不立文字・教外別伝の世界であり、ただ単に本を読んで禅がわかる…などといった安易なものでは決してないのである。

不立文字とは言いながら、禅に関する書は世間に山ほど出ているが、それら禅の世界の語り方は強いて言えばすべてワンパターンというか同じ語り方であり、七～八百年かけて語り伝えてきた決められたパターンを単に継いで語っているだけである。その内容は佛でもない師匠が佛に感心すら

ない弟子との間にやり取りをしている…というのが殆んどといってよい。ゴータマ・シッタルダーは如何にして佛になったか、釈尊は一体何を悟ったかについては何にも書いてはいない。釈尊が一体何を悟ったかは、こうしたマニュアル本で書けるほど生易しいものではなかった筈である。

第一、『法華経』には釈尊が「自分は修行して佛になったのではない」と記している。釈尊は後の禅書にあるように、人と問答したのでは決してなく、見えざる霊との問答を経た筈であるのに、釈尊滅後はアッという間に人主義に成り果ててしまった。これは大きな問題を孕んでおり、いまこそ佛教はその原点に立つべきではないのか。

仮に人が「悟った」といってもその悟りの境地・段階というものは各人各様であり、それらの者が真に「佛になった」というものでは決してなく、またそうした話を聞いたためしもない。また、その人の仏法はその人のもので、簡単に分かったり、他が受け継いだり出来るものではないということである。自分こそ禅がわかった、真理を悟った、道を得た…などといったことは、真面目に禅修業に明け暮れするものの言葉ではなく、また、そうした低劣な心境の者は一人も居ないのである。

これは臨済の思想といってもよいであろうが、良寛や一休が弟子を持たず、師匠よりの允可を重視せず、説教や寺院経営もやらず、堕落した寺院佛教に目をそむけて自己一代のオリジナルで生涯を終わったのは、彼らがこうした点を真摯に考え抜き、且つ真に憂えていたからである。

六、西山万寿宮（全真教道教）

次の日、私たちは南省陸軍学院を右に見ながら、南昌市省大（南安）の公路収費管理所を通り、道教寺院である西山万寿宮をめざした。途中の道路は全面舗装されてはいたが、ところどころに未修理の窪地があり、しかも車のshock absorber（ショックアブソーバー）が磨耗しているためか、ガックンガックンと衝撃が強く伝わってきて、まるで馬に乗って駆けているようであった。

走行中の車中での話であるが、「走行距離にして普通、何万キロぐらい乗ったら車を買い換えると思うか…」と私たちに聞くので、「まあ良く走って二〇万キロ位だろうか」と思っていたら、なんと百万キロになるまで修理しながら大事に乗るのだと運転手が答えたのには驚いた。

西山万寿宮の正門

西山万寿宮に着いた。道観前の通りには御土産物の売り場がずっと続いており、道観への来客・訪問者と見ると、たちまちあれを買ってくれ、これを買ってくれといって集まってくるので、それを逃れるのに必死といった有様である。本当はどんな物があるのか見てみたかったが、連れの者たちに促されてそそくさと道院に入っていった。

中ではあちこちで爆竹が激しく鳴り響いていた。丁度お祭りがあっているのか、大勢の人々が道院に集まっていた。聞いて見ると、許真君が農暦の八月一日に仙人になったとのことで、今日こうして信仰者が集まってお祝いしているのだという。伝統の祭りであるらしい。

そして、爆竹は喜びと感謝のために鳴らし、灯明は神との交通（語り）のため、未来を照らすために灯すのだという。

熊國寶老師の説明を伺う

この道院は大変大きなもので、道観だけでも立派な建物が八つも立ち並んでいた。

謹母殿	三宮殿
三清殿	関帝殿
夫人殿	高明殿
玉皇殿	財神殿

道観内の祭り　風景

一六〇〇年続いているというこの万寿宮で、私たちは幸運にも新建县道教教会・副秘書長で浄明道源編纂室・浄明道文化研究室の代表である「熊國寶」師の懇切丁寧なるお導きと解説を戴くことが出来た。

この道観の教えの中心は元を立て、生命（魂）の根源を大切にし、功徳を積むにあり、親・先祖への「孝」と国（民族）・皇帝・天神への「忠」を通して仙人に成る道を説く。

遷の字はここから始まっており、これはもともと「西の山の大いなる人」という意味を表すのだという。当道観では道教の行法を実践し、玄道に通達した道士には結局、出会えなかった。そこで、此の道教寺院に仙人として祀られ、今もなお尊崇されている「許真君」と「西山万寿宮」の由緒について以下に記しておこう。

神籤を引く信仰者

（一）　許真君について

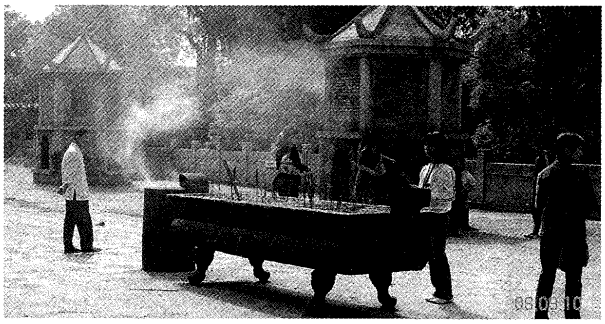
許真君は名遜、あだ名は敬之といい、江西省南昌市生まれであった。“真君”という名は道家の称号である。《庄子》には「真を修行し道を得る人を真人と称す」という記載がある。また真人は仙人であり、“真君”は仙人の尊称である。南北朝時代の歴代の皇帝は有名な道家、道士には真人という称号を与えていたのである。

“許真君”という称号の歴史は長く、主に江西省の民間から生まれた呼称であり、民間の人々は彼を直接“許遜”と称することはなく、“許真君”あるいは“福主”と称することが普通である。また、許遜は旌陽という地方の官僚になったこともあることから、有識者の間では彼を“許旌陽”と称しているものも居る。また、中国道教の人々は許真君を“都仙”あるいは“高明大使”と呼んでいる。

許真君の原籍は河南の中原である。唐代の伝記には許真君の原籍は河南の汝南郡汝南であると記載していたが、その後、南宋時代の道士らが潁川郡許昌に訂正した。それは北宋時代に欧陽修という人物が晩年引退後、潁川郡に行き許旌陽の子孫とよく接し、話をする内に判ったからである。欧陽修（一〇〇八―一〇四八年）は文学者であり、また歴史学者でもあった。あだ名は永叔、廬陵（現在の江西吉安）生まれで、二四歳で科挙に合格し、西京の守備大臣や枢密の副使を勤めた。

許真君の曽祖父許王琰氏、祖父許玉氏、父許肅氏は元々河南省中原の名家の出である。東漢時代に地元の戦乱に巻き込まれ、父許肅氏が一族を連れ、今の南京に渡り、安徽省に向かう途中、祖父許玉氏が失踪した。その後、一族は江西省豫章に辿り着いた。この場所が《南昌県誌》に記載された“許仙村”であった。

許真君は二三九年に四人兄弟の末子として生まれ、上には長女次女長男がいた。幼いときに父と兄を失い、苦難の少年時代を送った。彼は小さい時から賢く聡明で、厳しい母親の仕付けを受け、五歳頃には書院に通い、若いときから陰陽や道家の書籍を読み、天文や地理、法規や陰陽五行、予言などの知識を習得した。三国時代、許真君二六歳の頃、彼は暴君政治に不満を感じ参政せず、道の路に入り、現在、南昌市から三十キロメートル程離れた場所にある西山、ひと昔前は逍遙山と呼ばれていた地に移住し、道を修行することにした。太康元年（二八〇年）真君が四二歳の時、晋代司馬炎の戦いによりこのあたりが統一され、許真君は西晋朝廷の召還により、家族を西山に残したまま、四川省旌陽県の県知事に就任した。彼は就任後、民意を反映させるため、まず制令を改正し、地元の官僚の腐敗や汚職を一掃した。また、県風を正しくするため、“忠、孝、慈、仁、忍、慎、勤、倹”の八文字を提唱した。そのお陰で一〇年の間に旌陽県は大きく変わった。五二歳の真君は政界を引退して豫章に戻った。真君は老後の生活を送るのではなく、江西の水害の原因は人的な迷信によるものであると考え、科学的な方法で森林や環境を保護し、長年この地に災害などをもたらした洪水を防ぎ、地下水を制御したのである。許真君が治水に成功したのは七十歳になった時であった。



線香を立てる若い人達

（二）　修身伝道

豫章に戻った時、八十六歳であった許真君は再度西山に行き、西山の天宝洞で母から伝授の功法を修得し、“九転丹成”の奥深い意義を悟った。また、弟子に凈明忠孝の教義を昼夜徹して教えた。数十年来、彼は山中に於いて肉体を鍛錬し、道理や哲学を悟り、丹薬を錬る毎日であった。百十八歳の頃、鮮卑族集団の慕容催君主が黄河の南部を支配し、その勢力を河南、洛陽まで伸ばし、また中原まで伸ばそうとしていた。許真君は戦場に行くことを決意し、軍隊に入って敵と戦い、勝利をもたらしたという記述がある。戦場で勝利した許真君は、先祖の故郷である中原を尋ね、感極り、古い漢詩「洛中何郁郁、冠帯自相索、長衢羅夾巷、王候多第宅。両宮遙相望、双闕百余尺。極宴娯心意、戚戚何所迫？」を思い出し、昔の諸々の事柄に思いを馳せた。その後、許真君は西山に帰り、隠居生活を送った。寧康二年（三七二年）の八月、許真君一三六歳の時、自宅に数本の古い松や数個の丹薬を煉る臼と許大を残し、家族全員が何の跡形も無く消息を絶った。暫くして西山の住民の口から「許真君はあの日に家族四三人と家畜を連れ、家屋と共に天に昇って仙人になった」という噂が流れ、これが伝説になった。この事は江西省の内外にひろまり、許真君に関する伝説や神話などが書籍に記載され、またよく人々の口にのぼった。こうして書籍に記載され出版されるにつれて、全国各地に“許仙祠”や“旌陽祠”といったものが数多く建てられることになった。

西山万寿宮・玉皇殿

（三）　西山万寿宮の由来

西山万寿宮は現在の南昌市から西南に約三〇数キロメートル、新建県西山鎮のところにあり、元逍遙山と呼ばれている。道家の人々の間ではこの地を三十二の福地、或いは四十の福地と称し、ここが許真君の隠居、修行の場であると言われている。しかし“許仙祠”には甥の許簡氏が許真君の自宅を改造したのであって、彼の子孫により管理されていた。また、南北朝時代に陸修静氏が道教を整理し、改革した。これにより上清や霊宝などの宗派は江南地区で大きく発展し、道教の教典が大量に出版され、また館や観が増えた。このような状況に影響され、許簡氏が“許仙祠”を道観と改名した。また、許真君が旌陽から持ってきた蜀の錦を黄堂祠母の神位の前に置き、錦の帷としたことも改名の起因になった。更に許真君は天に昇るときに、自宅の上を回りながら昇っていったので許簡氏が“許仙祠”を游帷観に改名したとの説もあった。游帷観はその後、隋煬帝の大業年に火事に遭い、全焼し、数十年間ここは廃墟であった。これにより西山万寿宮が道教の発展を妨げることになったが、幸いに西山万寿宮から数十キロメートルの位置にある旧観、特に豊城烏石観や新建丹陵観には参拝者が多く、その参拝者たちが西山の許真君道教を伝え広めるために大きく貢献し、また、游帷観の再建を促したのである。

胡慧超、あだなは抜俗、出身地は不明である。唐高宗上元間（六七四―六七五年）廬山からきた者である。自称五二歳、身長が高く、がっちりした体格のため、人々は彼を“胡長仙”と呼んでいる。彼は東晋・西晋時代と南北朝時代の歴史を知り尽し、また、許真君の道教に精通していた。胡慧超氏は永淳間年（六八二年）から長安年（七〇三年）の二十数年に游帷観を再建し、許真君という人物の歴史などを言い伝え、孝道の教義や教法を制定した。全国の道教界に西山万寿宮道教の創始者を大いに宣伝したため、元代の凈明派から注目されるようになった。

宋太宗太平年間の楽史《太平寰宇志》に北朝の王朝が道教を崇拝するのは唐代より盛んであり、特に許真君道教を敬い重んじている。許真君を太上老君の四十一代目として讃えたのである。また、宋真宗大中詳符三年内帑金（ないどきん）を出して観宇を増築し、後内帑金の額を“玉隆”と改名したが、この“玉隆”は《霊宝度人経》にある「大釈玉隆騰勝之天」から来たのであり、従って観を宮に昇格したため、自然に許真君は「帝王の上」という順位になるのである。また王安石氏の《旌陽祠記》にも観から宮に昇格した記載があり、更に“万寿”という二文字も加えていたと言う。

道観内の白壁に書かれた教え

（四）　浄明道の確立

一一二七年南宋時代に金兵が江南地域に出兵し、至るところで殺人や放火するなどにより人民の怒りを引き起こした。この惨状を見て西山玉隆宮の道士である何真公氏が建炎二年（一一二八年）許真君に助けを求める祈祷をしたが、その願いを叶えるかのように神が渝川に降臨し、霊宝浄明秘法が現れ、これにより忠孝を尽す民に変わった。また、紹興元年辛亥年（一一三一年）の秋に許真君が玉隆宮に降臨し、浄明忠孝大法を伝授したという。当時、民間に崇拝者が多く、しかも道士が非常に少ないため、何真公氏と玉隆宮の道士が伝度道士五〇〇名を集め、経典などを専門的に扱う組織を勘案し翼真壇を作った。

浄明道は南北朝時代の陸修静氏による道教の改革や、教典の整理編集による大量出版など、また、館や観の数を増すことにより宗派を確立することに大きく発展した。その後、胡慧超氏が永淳間年（六八二年）からの二十数年に游帷観を再建し、許真君という人物の歴史などを言い伝え、孝道の教義や教法を制定した。これを土台に何真公氏は浄明道を更に具現化したのである。それは、道経を編集することであった。代表的な経典としては《太上霊宝上品経》、《太上霊宝飛仙度経法》、《霊宝浄明黄素書》、《太上霊宝浄明入道品》などである。その二は何真公氏の《太上霊宝浄明新修九老神印伏魔秘法》に「・・・・・神が渝川に降臨し、霊宝浄明秘法が現れ・・・・・、」と霊宝浄明秘法を紹介したのは、それ以前の書物には許真君に関する資料やその他の教派の資料に記載がなかったからである。その三は、翼真壇を作ったことである。浄明道教義は以上のような形成過程を経て、体系化されていったのである。（注4）

七、おわりに

今回の研究調査は江西省南昌市の禅寺である真如禅寺と全真教（道教）の発祥地である西山万寿宮との二箇所であった。

人里を遠く離れた山奥の幽邃の地で、閉関といって修行のために関房の扉を閉め切って三年もの間、一歩たりとも外へ出ずに籠もってひたすら参禅に邁進し、真摯に悟りを求めての修行専一にいそしむ老僧に出会い、親しく道について語り合うことが出来た。私たちにとっては大いなる収穫であった。「坐禅は悟りの手段ではなく、悟りは迷いの中にある」「坐禅することが悟りであり、坐禅して求めるものではない」と説いたのは六祖慧能から法を嗣いだ南嶽懐譲であった。

日本では飛鳥・奈良時代に慧満に禅を学び帰国した道昭や、神秀の北宗禅を伝える唐僧道王璿の来日があっており、古くから日本にも禅は伝わっていた。そして、鎌倉初期に入宋した栄西が臨済禅を、次いで道元が曹洞禅を伝えて日本の禅は愈々盛んになった。また、江戸時代には明の隠元が来朝して黄檗宗を伝えたことでも知られている。

達磨大師のように時の権力や体制に迎合せず純禅を貫いた禅僧の清冽な生き方は、日本の禅僧たちにも流れており、例えば道元希玄や一休宗純、大愚良寛たちに見ることが出来る。道元も栄西も「日常心是道」という馬祖道一のことばを生き抜いた。「煩悩をもちつつ悟りに入れ」である。「市井の仙人たれ」というべきか…。

【註】

（1）『虚雲老和尚年譜』によれば、次のように記されている。

真如禅寺坐落其中。「雲居自唐代元和三年（公元八〇八年）開山、為歴代祖師最勝道場……」惜日寇中原時一度焚燬。惻傷祖師道場零落至此、老和尚毅然決然以一百一十四歳高齢来到雲居山、僅及三載就恢復了祖師大道場――真如禅師、蓮花城亦成了老人霊骨帰安之処。

今天為了継承虚老遺風、続尚宗門下一脈気息。本寺責無旁貸。冬参夏学、農禅並重、真如禅寺在一誠大和尚的主持下正努力行之、並竭誠献上此法寶、惟願與大衆因之而發菩提心、深信因果、普利有情、早登覚岸。

―（以下、略す）―

佛暦三〇三一年（公元二〇〇四年）歳次甲申七月三十日

真如禅寺住持純聞　謹識

（2）五祖弘忍には法を嗣いだ頓修頓悟の禅を標榜する六祖慧能の他にもう一人神秀という優れた弟子がおり、この神秀は北方の長安で漸

修漸悟の修行三昧の禅を広めたので北宗禅という。

（3）拈華微笑は禅宗では以心伝心で法を体得する妙を示す時の語。釈尊が霊鷲山で説法するが、その時、梵天が金波羅華を献じた。それをかかげて釈尊が大衆に示す（拈華）。誰にもその意味が分からなかったが、ただ摩訶迦葉がその真意を知って破顔微笑したので釈迦は彼にだけ仏教の真理を授けた。これを拈華微笑という。釈尊の仏の心（悟りの境地）が摩訶迦葉の心に伝わった、つまり以心伝心された訳である。

（4）程宗錦『洞天福地―江西道教名山游』、百花洲文艺出版、二〇〇二年六月。
章文煥『万寿宮』、华夏出版、二〇〇三年八月。
陈立立・黄教珍・李星・王健军・李紅浪『万寿宮民俗』、江西人民出版、二〇〇五年十一月。他、参照。